

日本における乳癌の臨床病理学的特徴と診療の動向：2004年～2011年の日本乳癌学会の乳癌登録を基に

紅林 淳一（川崎医科大学）

【目的】

我々は、2004年～2011年の日本乳癌学会の乳癌登録を基に日本における乳癌の臨床病理学的特徴を調査する研究を企画した。さらに、日本における乳癌の診療の動向も分析した。

【患者と方法】

25万人余りの乳癌患者が日本乳癌学会の乳癌登録に登録された。人口統計学的、臨床病理学的な因子は、乳癌学会の関連施設からWebシステムにより登録された。

【結果】

人口補正後の年齢別の乳癌患者の分布では、40歳代後半と60歳台前半に二つの明らかなピークが認められた（図1）。検診発見率の増加は、乳癌の早期発見や非浸潤癌の比率の増加に寄与している。エストロゲン受容体（ER）やプロゲステロン受容体（PgR）陽性の乳癌が増加している。乳房温存手術が行われる比率は2006年まで増加したが、2007年にその増加は止まり、その後は約60%で安定している（図2）。センチネルリンパ節生検のみが行われる患者の割合は、堅実に増加している。抗HER2モノクローナル抗体トラスツズマブと化学療法で術前療法を受ける患者や術後にアロマターゼ阻害薬で補助療法を受ける患者の割合が増加している。術後の補助化学療法として、アンストラサイクリンを含むレジメの使用頻度は低下し、タキサンを含むレジメの使用頻度が増加している。術後補助トラスツズマブ療法は、2007年から急速に増加している。

【結語】

本研究は、乳癌登録データベースを基に行われたが、日本の乳癌のいくつかのユニークな臨床病理学的特徴が明らかとなった。本研究結果から、日本における乳癌診療は、多くの臨床試験から生み出された科学的根拠に従って行われていることが示された。

Fig. 1 Population-adjusted age distribution of breast cancer patients between 2004 and 2011 in Japan

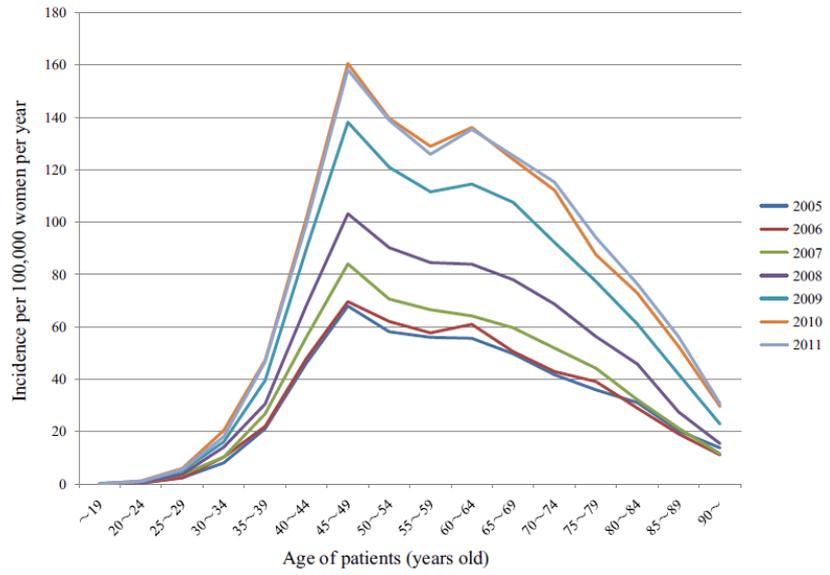


図1 日本における年代別の乳がん発症率

Fig. 5 Percentages of annual rates of breast cancer patients according to surgical procedures for breast tumors between 2004 and 2011 in Japan

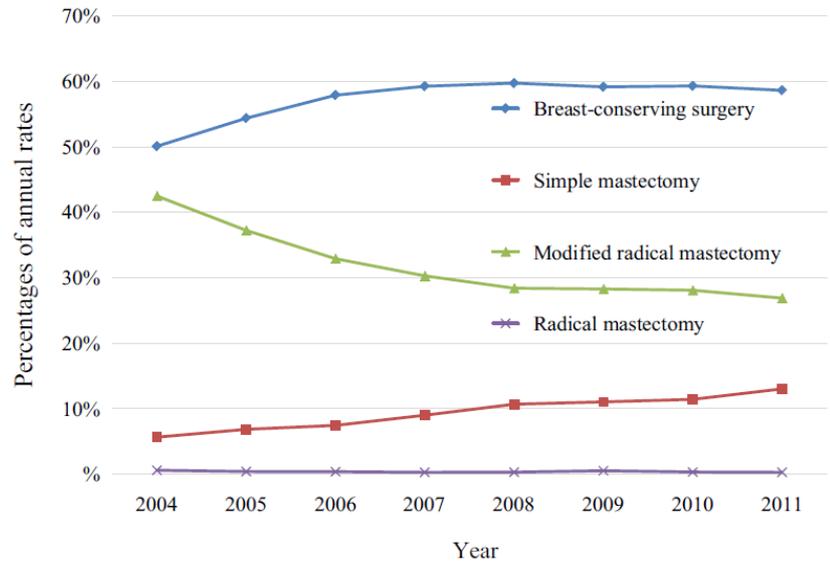


図2 日本における乳癌の手術術式の動向